

スラバヤ日本人学校（中学部）におけるSDGsを柱とした 持続可能な社会のための総合的な学習の時間の実践

前スラバヤ日本人学校教諭

京都府宇治市立黄檗中学校教諭 堂本 博之

キーワード：SDGs・国際理解・キャリア教育・カリキュラムマネジメント・社会とつながる学び

1 はじめに

スラバヤ日本人学校（Sekolah Jepang Surabaya）は、インドネシアジャワ島の東部に位置する在外教育施設である。本校中学部の教育の特色として、日常的な英会話・インドネシア語会話の授業や委員会活動、現地公立中学校を交流校として行う年3回の国際交流行事（交流校招待、国際文化交流会、交流校訪問）、年1回の宿泊行事（自然教室・修学旅行を隔年で実施）、日系企業の事業所における職場体験、現地（グローバル環境）で働く日本人講師による進路講演会（年2回程度）を実施している。このように、インドネシアに触れる体験活動を通し、異文化を理解し、豊かな国際感覚の育成のための国際理解教育の推進と、スラバヤ近郊の企業と連携したグローバルな職業観や勤労観育成のためのキャリア教育の推進に取り組んできた。これまで積み重ねてきた伝統を継承し、21世紀を生き抜く力の育成と本校の教育目標が目指す「豊かな人間性と国際感覚を身につけ、自分の夢に全力で取り組むスラバヤっ子の育成」のさらなる実現を図るために、持続可能な開発のための17の目標“Sustainable Development Goals”（持続可能な開発目標：以下SDGs）を柱として総合的な学習の時間の改善と実践に取り組んだ。

2 SDGsを柱とした総合的な学習の時間の目標

総合的な学習の時間（以下スラバヤタイム）のテーマを「未来を選ぼう！—The Global Goalsを目指して」とし、学習指導要領が示す目標と本校の教育目標、生徒の実態等を踏まえ、以下の3点を目標とした。

- ・「自分を大切に、人を大切に、未来を大切にできる夢」をもつ生徒の育成のためにSDGsの視点を学び、探究する。（探究的な学習の手法を学び、良さを知る）
- ・スラバヤに住む日本人の方や日本に関わりの深い方の職業講演や、職場での体験学習を通じて、SDGsやCSR（Corporate Social Responsibility：企業の社会的責任）の取り組みを見聞することで、企業活動を通じた社会課題の解決の取り組みや社会貢献の在り方を知り、国際協調の精神とグローバルな職業観を養う。（国際理解・キャリア教育を通じた社会参画への態度）
- ・スラバヤにあるインドネシアの中学校との交流や校外での学習を通して、互いの文化の違いや良さを認め、尊重し、平和を希求するための国際理解を深める。（学びに向かう力・人間性等）

これらの目標を達成するための学習の中で、自分が属するコミュニティ（地域や社会）との相互作用（交流）を通じて、学んだ知識を統合していく過程を大切にし、生徒がより広く、より複雑なグローバルな課題に対する認識を高める。そして、社会課題を身近なものとして考えることが当たり前となるような学習を通じて、平和でよりよい世界のために貢献しようとする意欲や態度を高めることを目標とした。

3 SDGsを柱とした総合的な学習の時間の学習の取り組み

(1) オリエンテーション SDGsとは何か・日本の現状・インドネシアの現状・世界の課題（4～5月）

世界の課題と解決のための目標SDGsについて知り、自分の身近な世界との課題とのつながりを考えた。

生徒自身の既有的知識をもとに、身近で関心のある課題を手掛かりとして、私たちが暮らすこの地球にはどのような課題があるのか、私たちの生活とどのようなつながりがあるのかについて話し合い、その解決にはどのような行動が必要なのかについて考えた。複雑多様化した世界における課題は、1人の力や1つのアクターでは解決できず、様々な分野で活躍する人々の協力が必要である。一人ひとりの主体的な行動と、他者との協力、役割分担、社会的分業の必要性について知り、グローバルリーダーが設定した17の目標の背景について関心を高めた。さらに、私たち日常のどのような行動が課題解決につながるのかについて話し合い考えた。

(2) 達成状況をどのように把握するか。私たちは何から取り組むべきか。

JICA（国際協力機構）地球広場の動画視聴やSDGsのannual report（年次報告書）を参照し、どのような指標でSDGsの達成状況を評価しているのか、日本、インドネシアをはじめ、各国の達成状況などについても学んだ。自分たちはSDGsの達成のためにどの課題に、どのように取り組んでいくことができるのかについて話し合い、課題意識を深めた。

(3) 世界遺産とSDGs（5～6月）

修学旅行で訪れる、世界遺産サンギラン初期人類遺跡群、ボロブドゥール遺跡群、プランバナン寺院など中部ジャワ地方にあるインドネシアの価値とその持続発展について、SDGsの視点から考察する。

世界遺産とは「人類共通」の財産であり、過去から受け継ぎ、未来の世代に受け継ぐべきものである。世界危機遺産の課題やインドネシアの世界遺産コモド国立公園の現状と課題を参考に、世界遺産とSDGsのつながりやSDGsの視点から世界遺産を持続させていくためには、何が必要か、ホワイトボードを用いて話し合った。「世界遺産がなければ、人々は中部ジャワにくるのか？」や、「歴史の営みの中で築かれた世界遺産という価値あるものが存在することによって、世界中から多くの人が集まるのではないのか」「その強みを活かして、課題を解決できないか」、また、「人が多く集まるからこそ生まれる課題もあるのではないのか」などについて意見が出された。

「世界遺産とSDGsがどのように結びつくのか」という疑問や「世界遺産の価値を生かすことで、SDGsの達成につなげることができないか」という課題意識をもち、その解決のために、「情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現できるようにする」ことを意識した。

事前学習では、サンギラン初期人類遺跡・博物館訪問に備え、社会科で「初期人類の発生」、活火山ムラピ山でのジープツアーに備え、理科「岩石の生成」、現地取材のために、英語や英会話、インドネシア語会話の時間に、インタビューの仕方など、カリキュラムを工夫して学習を行った。サンギランでは、既習の知識と英語とインドネシア語の解説を手掛かりに、ジャワ原人の頭骨の違いを観察したり、マンモスの化石に実際に触れたり、堆積層から太古の貝の化石などを発掘し観察した。ムラピ山では、噴火博物館を訪れ、噴火による火山活動の恐ろしさを知ると同時に、噴火口の付近から切り出される岩がボロブドゥール遺跡やプランバナン寺院を築いたこと、現在も家屋や道路など私たちの身近な生活の資源になっていることを体験的に理解した。

ボロブドゥール遺跡、プランバナン寺院、マリオボロ通りなどの訪問先では「YOUはどこからジョグジャカルタに？」というテーマで、「どこから来たのか」「なぜここに来たのか」について外国語でインタビューを行った。調査から、世界遺産の価値が世界中の人々をひきつけていること、遺産を人類共通の宝物として、後世に持続可能な形で引き継いでいくことの大切さを実感した。また、遺跡公園内では、ごみ箱の数を増やし、分別回収の啓発を行うように取り組みの推進にもかかわらず、多くのゴミが散乱しているというゴミ問題の現状に関心を寄せていた。陸に捨てられたゴミは、雨によって川に流され、それが海を汚染している。人々のゴミ問題への意識が足りず、必要な習



ボロブドゥールで、英語やインドネシア語での取材

慣が身につけていないため、啓発や教育を充実させることによって、人々の意識や行動を変えていかなければならない。そのために発信していくことが大切であるという意識や、1つの課題には関連する課題があり、1つの課題解決が多くの課題解決につながるのではないかという前向きな課題意識が体験を通じて、生徒たちの中に芽生えた。

事後学習では、国語の「魅力ある新聞記事をつくろう」と連携し、壁新聞づくりのポイントを学習し、実際の訪問や取材をして調べた結果を各グループがまとめ、中学部内で発表会を行うとともに全校集会で小学部にも、新聞の紹介と掲示を行なった。SDGsを柱にカリキュラムマネジメントの視点で、教科を横断して学習を進めたことによって、限られた時数を有効に活用し、探究的な学習を充実させることができた。

(4) 学びを外に開く ー夏休みの課題を通じてー (7~8月)

夏休み前に、1学期の学習を振り返り、「教育はすべての人に行き届くのか」をテーマに話し合った。夏休みの課題として、「よりよい世界の未来を目指して一私たちから始まる一歩」というテーマに沿って、「JICA 国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト 2019」応募することを前提に作文の課題、さらにレポート課題を出した。2学期の学習に向けた課題意識をもつため、また日本に一時帰国した際に日本での取り組みや各地域でのSDGsの認知度など、それぞれの関心に応じて、SDGs 17のゴールについての課題とその解決の取り組みについて調べ、考えをまとめた。夏休み明けの報告会では、各自の課題意識や調べた内容を発表共有し、疑問や質問を出し合い、学びを深め合った。自分達の考えや取り組み、課題意識がどのように評価されるか外部の評価を受けるために応募したコンテストでは、「学校賞」を受賞し、自信を深めた。他にも、「SDGs まちづくりアイデアコンテスト」や「SDGs ラインスタンプ企画」などに、社会科や美術科を中心に応募した。

(5) 政府のSDGs・外務省の仕事とSDGsの取り組み<第1回進路講演会> (9月)

SDGsを推進している外務省の方に直接話を聞くため、在スラバヤ総領事館に依頼し、「外務省の仕事・外交官のやりがいについて」「SDGsについて~日本の取り組みと課題、今日本の中学生に期待されること~」をテーマに講話を頂いた。国と国の友好関係の重要性、SDGsの達成を目指す国際社会の中で日本人として国際社会に参画、貢献するための勤労観、職業観とそのやりがいに触れ、「(他国と)ともに持続可能な経済成長をしていくために、学び続け、友好関係を発展させ続けていくことが重要である」「SDGsを遠い、大きな目標としてではなく、一人ひとりが自分事としてとらえ、“No one will be left behind.”のため、地球規模の課題解決にみんなが参加しようと思うことが大切である」など、生徒たちは講話やその後の質疑から学びを深めた。

(6) 企業のSDGs 味の素(企業)の取り組み <第2回進路講演会> (11月)

第2回の講演会は、外務省がSDGsの先進的な取り組み例として紹介し、スラバヤ近郊に工場のある企業「味の素」から講師を招き、キャリア教育(進路・職業選択、夢の実現、仕事のやりがい)の視点と、国際理解(SDGsに関するAJINOMOTOの取り組みと課題、SDGs達成のために今日本の中学生に期待されること)の視点から講話を頂いた。「なぜ企業はSDGsに取り組むのかという話から、事業(調味料ビジネス)を通じて社会課題(日本人の栄養状態)を改善するという理念がSDGsに結びついているのがわかった」「地域や社会とともに価値を創造することで、経済価値を創り出すAjinomoto Group Shared Value (ASV)のような実践が大切だと思った」「モジョケルト工場のバイオサイクルの話から、実際にどのように取り組んでいるかよくわかった」「営利だけを求めるのではなく、(環境持続性、社会包摂、経済発展のバランスを取りながら)世界が抱える社会課題の解決に貢献できる企業活動が求められていることがわかった」「生産者の立場だけではなく、消費者の立場からもできることがあると思った」などの記述が見られ、一人ひとりがそれぞれの立場で、まず学び知ること、そしてできることから行動を起こしていくことの重要性を改めて考える機会となった。

(7) 職場体験とSDGs (11月)

キャリア教育(自己理解や働くということについて学ぶ)の視点、国際理解(海外での製造現場や接客業での

体験)の視点を継承しつつ、学校の学びと実社会、実生活がいかにつながるのが、SDGsは今、実際の働く現場でどのように取り組まれているのかを知ることを目的に、パスルアン工業地帯にある日系の3つの工場とスラバヤ市内の飲食店や卸売業の協力のもと、職場体験を実施した。日本国内だけでなく、アジア、欧州、北米など、世界中に輸出される製品の製造の過程を学び、工場の現場での実習、研修を行い、働く方への取材を行った。スラバヤ市内にある飲食店、卸売業(スーパーマーケット)では、直接の接客、調理補助、商品管理などを体験し、取材を行った。体験や取材からは、実際にSDGsに取り組んでいる企業とまだ取り組んでいない企業があることがわかった。しかし、各企業が実践しているCSRなどの、社会貢献活動や環境保護活動の取り組みはSDGsの達成につながっていた。体験後、それぞれの企業の活動をSDGsの視点で捉えなおしたときに、どの取り組みが、どのゴールの達成につながっていると考えられるのかについて、考察を行った。

(8) スラバヤ日本人学校(以下SJS)とSDGs(1月~2月)

3学期は、SDGs達成のために、これまでの学習、体験をまとめ、Student Action Planを策定し、報告会を行った。5つのグループに分かれて、各担当の教員とともに、学びをまとめ、自分達が取り組む行動目標を設定し、パフォーマンス形式で発表を行った。「SDGsとは、地球の未来を変えるための目標であること」、「世界遺産とSDGsでは、大切なものを守り続けていくための課題と取り組み、そして大切なものを大切と感じられる心やそれを守り受け継いでいこうという心の大切さ」、「政府企業のSDGsでは、政府、企業、市民、誰1人取り残さず、全員参加で解決に取り組むことの大切さ」、「職場体験とSDGsでは具体的な取り組みの中に、今ある社会課題の解決につながる視点や発想があること」、「SJSとSDGsでは、私たちがこれまでに取り組んできたことの中にもSDGsの達成につながる取り組みがあること」を伝え、「私たちができる小さな一歩」として、具体的な行動目標を掲げ、保護者、5、6年生、インドネシア日本人学校校長会の参観の中、報告会を実施した。

参観に来た5、6年生の児童からは「自分たちの身近な所にもSDGsの達成に貢献できることがあると分かった」「いままでそんな風には思っていなかったが、これなら取り組める」などの気づきが見られた。

4 まとめ(成果と課題)

学習を通じて、当初は、表面上だけの知識や自分たちの生活とは離れた大きな問題に対して、他人事として、意見を述べていた生徒たちが、取り組みの中で、世界の問題が自分たちの生活といかにつながり、自分達ができることは何かという視点で話し合えるようになったことは大きな成長であった。今回の学習が1つの礎石となり、「豊かな人間性と国際感覚をもったスラバヤっ子」として、今後もよりよい地球の未来のため、複雑多様化する社会課題を身近にとらえ、その解決のために探求し続ける意欲や姿勢につながることを期待している。

さらにSDGsの取り組みが職員室の中で広がり、小中学部全ての学年で、SDGsを意識した実践が行われ、職員室の中で盛んに情報交換や実践へのアイデアの交流が行われ、職員室が活性化したことも成果の1つであった。

一方で、このAction Planが実効性を持たない文言になるか、それとも行動と改善を繰り返しながら、実践的な探究へとつながるかが今後の課題である。また限られた任期の中で人が入れ替わることが在外教育施設における課題である。取り組みの継続には、設定したAction Planの達成状況の評価(数値化・分析)と改善の取り組み、小中のつながりを意識した系統的で効果的なカリキュラム作り、教員の協働と個々の能力を生かした取り組みとその継承が必要であり、職員集団のパートナーシップと協働体制構築のための日々の営みが重要である。

最後に、SDGsを柱とした協働探究的な学習は、地球規模の普遍的で壮大な学習であり、学校教育の枠組みの中では完結し得ず、生涯にわたる探求課題である。それゆえに企業・地域との連携も容易であり、また企業・地域から見ても魅力ある教育価値をもつ。その魅力ある教育が、学校の価値を高め、ひいては日本人社会の活力の一助となることを願い、スラバヤの地で、素晴らしい生徒、先生、保護者、地域の方々とともに、実践に取り組むことができたことは幸運で貴重な経験であった。在外教育施設への派遣研修という貴重な機会をいただき、支え

ていただいた関係諸機関の皆さまへの感謝と、在任中の貴重な出会いとかけがえのない日々感謝し、学び得た視点を、今後の実践に活かしていきたい。